

多核クラスター錯体と分子磁性と水電解

筆者が学部生のときに錯体化学研究室（伊藤翼先生）の門を叩いたのは1998年、ちょうど二次元 CCD 検出器を装備した X 線散乱装置が普及し始めた頃である。大塩寛紀先生の指導のもと、幸運にも当時導入されたばかりの装置（Bruker APEX）を使うことができ、鉄やマンガンなどのクラスター錯体の構造を多数報告することができた。二次元検出器の登場以前はシンチレーションカウンターで反射点を1つずつ測定していく4軸型 X 線回折装置が主流であり、1サンプルの測定に数日を要した。休日・祝日を問わず、仙台の寒空の下、50 L のベッセルで一日2回液体窒素を補給しに行くのが、先輩方の日常であったらしい。近年の装置がものの10分程度で測定を終えるのを見ると、まさに隔世の感がある。・・・